

NEWS LETTER

1 修了生、がんばっています！

奈良県立青翔中学校
教頭 棚橋 浩一

奈良教育大学教職大学院ならではの絆

全国の先駆けとして創設された、奈良教育大学教職大学院の1期生として、平成20年度から、現職教員として研修する機会をいただいていたから、はや10年が経ちました。

大学院では、熱意と知性、そして、個性あふれる先生方の指導のもと、本当に多くのことを学ばせていただきました。また、先生方はもちろんのこと、キャリアや年齢は異なりますが、教育に対する熱い情熱をもった同級生とのかけがえのない「絆」（つながり）を得ることができました。

修了後は、主幹教諭、県教育委員会事務局、そして現職と、それまで想像すらしていなかった道を歩むことになりました。これらの重責を何とか果たして行くことができたのは、他ならぬ、この絆のおかげです。

困ったときは、親身になって相談に乗り、アドバイスしてもらえる先生方や仲間に出会えたことは、まさに、私の宝となっています。また不思議なことに、自分が置かれた立場で自分なりに頑張っていると、その絆の方から手をさしのべてくれることすらあります。「袖振り合うも多生の縁」を実感してきた10年でもありました。教職大学院での学びと出会いが、現在の私を支えてくれていると言っても過言ではありません。

今後は、このとても温かみのある奈良教育大学教職大学院へ恩返しをしていくとともに、この絆をさらに太くして、微力ではありますが、奈良県教育の充実に力を尽くしていきたいと考えています。

奈良県立教育研究所
指導主事 片尾 克年

私は、平成24年度から、現職教員院生として教職大学院で研修する機会をいただきました。教職大学院では、これまで学校現場で実践してきた自分の教育活動がどのような理論に基づいているのかを学び、新たに身に付けた理論を踏まえ、実践を行いました。教職大学院で、学校経営やキャリア教育を研究し、「高等学校におけるキャリア教育の構築」をテーマに研究しました。2年目は、現在とは異なり、勤務校で通常に担任や授業をしながら研究を進めました。勤務しながら研究を進めることは困難でしたが、多くの同僚の先生方に助けていただき、キャリア教育の視点での授業づくりについて研修を行い、ともに研究授業を行いました。これらの実践を通して、キャリア教育こそが、授業改善をもたらす、生徒の学習意欲等に変容をもたらすという方向性の確かさを確認できました。

教職大学院修了後、異動した高等学校で、教育コースの担任や進路指導部長を経験させていただきました。その中で、生徒の可能性の存在に気付き、その可能性を教え込むのではなく引き出すことが教育に求められており、教職大学院修了者には、そのような場づくりを期待されているのだと意識するようになりました。

昨年4月から県立教育研究所に異動し、教育行政に携わり、高校生のキャリア教育支援業務を担当しています。教育行政と学校現場が連携して取り組んでいくことの必要性を改めて感じるとともに、日々、絶え間ない研究と実践的指導力が求められています。しかし、日々業務を遂行できるのも、教職大学院で身に付けた「理論と実践の往還」のおかげであると思います。また、教育研究所では、教職大学院2年目の現職教員院生（長期研修員）の業務も担当し、教職大学院とのつながりを深く感じています。

さて、教職大学院では、ストレート院生や社会人院生、そして現職教員院生と経歴や年代の違う者が集まり、専門性と実践力を兼ね備えた教員になろうと各自が目指しています。普段生活する院生室は、まさに職員室でしょう。今でも教育の理論を学んだあと、実際にどう実践するかについて、院生どうしがお互いの知識を出し合い、共有しようとしていることでしょう。院生室でのつながりを大切にして、「理論と実践の往還」を実現していきましょう。

2 課題解決実習に取り組みました！

本教職大学院では、1回生及び2回生が以下にあげる学校現場での各実習に取り組み、実践的な指導力の強化等にも努めています。

課題探究実習は、連携協力校である公立学校のうち希望する校種の学校の教育活動に週1回、計20回参加し、授業補助を中心として様々な校務を経験することを通して、児童・生徒理解や授業・学級経営、その他の校務を学びながら自らの研究課題を探ります。

課題解決実習は、それぞれ課題探究実習で見つけた研究課題を中心に、学校の教育活動全般に連続して4週間取り組むとともに、教員として様々な課題に組織的に対応していける素地を身に付けます。

以下に、課題解決実習Ⅰを終えたM1院生の感想を掲載します。

阪本 佳奈美 実習校：奈良県立奈良西養護学校



実習期間中は視覚支援をテーマに、「国語・数学」で「時ごとと時間」の授業を担当させていただきました。子どもたち一人ひとりの発達段階が違うため、授業構成や視覚支援の内容の吟味が難しかったです。しかし、指導教員からのご指導・ご助言のおかげで実態に合った授業に近づけることができたのではないかと思います。「ホームルーム」では接客業を題材にし、ソーシャルスキルトレーニングを行いました。モニターに映る映像やイラスト、教員のモデリングに釘付けになる姿からICT機器の有用性を感じました。

ありがたいことに、給食指導、日常生活の指導だけでなく学校行事にも携わることができました。特に運動会は雨天の影響で延期になったり、プログラムの変更があったりで、学校全体で対応に追われることがありました。しかし、運動会の実施ができたこと、子どもたちが最後まで競技に参加できたのは教員同士の連携と想いがあったからではないかと感じました。そのような貴重な学びができたのは、忙しい時期にもかかわらず実習を受け入れてくださった奈良西養護学校の竹本校長先生、指導教諭の富山先生をはじめとする多くの先生方、そして暖かく迎えてくれた子どもたちのおかげです。

「僕たちも頑張るので、先生も頑張ってください」と、ある生徒から言ってもらいました。彼らも自分の目標や課題と向き合い頑張っている。私も教員を目指すものとして日々学び成長し続けていきたいと思っています。

荒木希実 実習校：大和郡山市立矢田南小学校



課題解決実習Ⅰでは、自身の授業力向上を目標に、第3学年の国語「秋の楽しみ」・「修飾語」、体育「幅跳び」を担当させていただきました。1ヶ月という期間は、私のこれまでの経験では最も長く、様々な不安を抱えて挑んだ実習となりました。

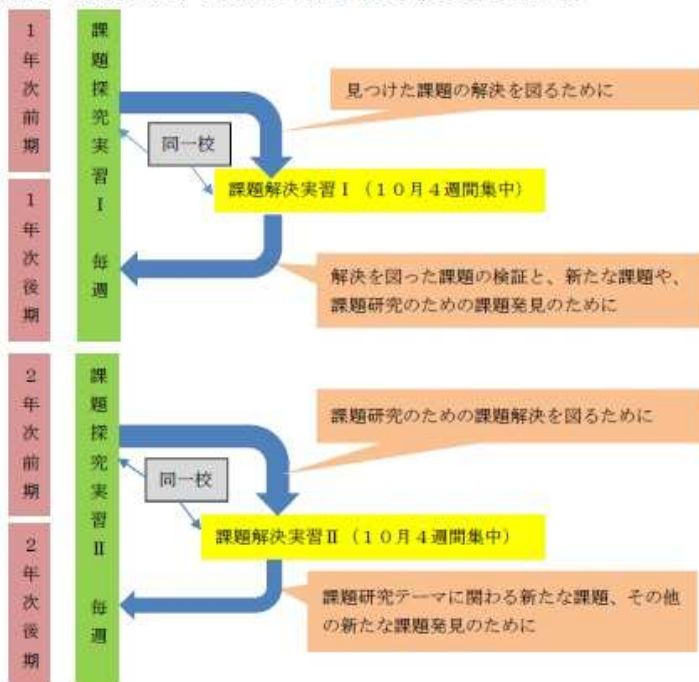
今回の実習での一番の学びは、「楽しさ≠学習の定着」ということでした。それを最も感じたのは、研究授業時の国語「修飾語(1/2時間目)」でした。例文に担任の先生を登場させたり、答えを考えた児童全員に発表させたりするなど、「児童が意欲的に取り組むためにはどうすればよいか」を念頭に構成しました。私自身が感じた授業の様子、また、見に来ていただいた先生方の講評からも、児童が「楽しんで」「積極的に」授業に参加できていたことを感じる事ができました。しかし、授業後

の振り返りには「楽しかった」が圧倒的に多く、一人だけ『係る』を知ってレベルアップできた』と書いてくれていた以外は、「こんなことを学んだ」「分かるようになった」等の理解に関する記述がありませんでした。

今までは、自分が進める・時間内に終わらせることが中心になっていたもので、「楽しさ」を感じながら授業が盛り上がっていた様子に満足感を感じて終わってしまっていたと痛感しました。子どもたちが楽しく意欲的に学べることは大切。しかし、「楽しい」で終わらずに、次の学習へとつなげられているかが大前提として必要で、今後の課題が新たに見つかった機会となりました。

最後になりましたが、今回の課題解決実習Ⅰ、そしてその前後の課題探求実習Ⅰも含めた約7ヶ月という長期間にも関わらず、谷校長先生、指導担当教員の澤井先生をはじめとする多くの先生方、そして矢田南小学校の子どもたちに心より感謝申し上げます。今回の実習での様々な経験を糧に、そして見つかった課題の解決に向けて、今後も教職大学院でさらに学びを深めていきたいと思っています。

<実習設計> ※原則として、1年次と2年次は、別の学校で実習を実施する。



昨年度の課題探究実習Ⅰでは、子どもたちの少しずつ苦手なことができるようにになっていく姿に感銘を受けたことを覚えています。今年度も引き続き、奈良西養護学校中学部に実習を受け入れていただきました。みんなと会うのは1年ぶり……どれくらい成長したんだろう？自分は何れくらい成長できたんだろう？と思いながら実習に取り組みました。



「井蛙不可以語於海」(せいあはもつてうみをかたるべからず)

2, 300年前の中国において成立した古典『莊子』の中に書かれている文言です。お察しの通り、ことわざにもある「井の中の蛙、大海を知らず」の基になった言葉です。

意味は既にご承知だとは思いますが、要は「自分の持っている知識が全てだと思っているような見識の狭い人間には、世の中の広さを説くことはできない」といった意味です。

何故、このような言葉を引用したのかというと、教職大学院での勉強を重ねて課題解決実習へと赴いた私自身がこの状態だったからです。本大学院では、「理論と実践の往還」を主たる柱として設定していますが、私はその本質を理解できていませんでした。

では、実際どのように「井蛙」であったのかご説明します。課題解決実習Iでは、上記の連携協力校にて、現代文Bの授業を受け持たせて頂くことになりました。1クラスとはいえ、生徒も定期テストに

向けた勉強をしなければいけないし、私もこの解決実習で何か一つでもいいから爪痕を残さなくてはなりません。

私がやらなくてはいけないことは、「藤野先生」という物語文の単元で

①生徒らには点数をとれるようにしなければいけない。

②更に言えば、そこから何が読み取れたのかを明確化させなければならない。

と、ステップアップした授業を行わなければいけなかったのです。理論だけをいっばしに学んだ気になった私に、これを実際教壇に立ってうまく運んでいく作業というのは、おおよそマトモに出来ていなかったと反省しています。ですので、授業については、まだまだ研鑽が必要であり、お恥ずかしい話ですが特筆すべきことはありません。指導して下さった先生は「この教材を通して何を伝えたいのかが不透明だ」と仰っていました。単純なことですが、理論だけ先行した頭でかちの私にはそれができていなかったのです。今後、「井蛙」にならないために、「実践に生かすことを念頭に理論を学ぶ」ことを一層心がけていきたいと思えます。



10月の多忙な時期にも関わらず、連携協力校の先生方は私にたくさんの経験をさせてくださいました。課題解決実習Iは学部のころに経験した教育実習とは様々な違いがあり、戸惑いもありましたが、新たな学びがたくさんありました。今回の課題解決実習Iでは連携協力校の先生方のご協力もあり、4週間で計42時間の授業をさせていただくことができました。この42時間を通して、「自分にとっては何時間もあるうちの1時間であっても、生徒にとってその1時間は1回限りの貴重な1時間である」と強く感じました。

1つの授業を行うだけでも教材研究や実験道具の確認、指導案の作成など様々な準備が必要でした。これらをきちんと揃え、準備万端だと思っても、実際に生徒を前に授業を行うとうまくいかないことが多々ありました。準備が万端であっても、しっかりと授業を進められるとは限らないのだと学びました。そこでの反省点を見つめ直し改善策を練ることも準備の過程であり、授業準備と教材研究などがすべて繋がっていないと生徒の学び生み出すことはできないのだと感じました。

また、この4週間の経験を通して教員という仕事の難しさを考えさせられました。しかし、それ以上に教員になりたいという気持ちをより強くしてくれました。連携協力校の先生方は授業づくりだけでなく、校務分掌や生徒指導、部活動指導などたくさんの仕事をこなされていまして、分かりやすい授業を行いながら、生徒と関係づくりを行い、学校職員としての仕事もこなすなど、先生方の日々の仕事を間近で見させていただいたからこそ、改めて教員という仕事を見つめ直すことができました。

最後になりましたが、課題解決実習Iを行うにあたり快く受け入れてくださった生駒市立生駒中学校の藤原校長先生、指導担当教員の三浦先生をはじめとする多くの先生方、そして温かく迎えてくれた子どもたちに心より感謝申し上げます。自分の理想とする教師像に少しでも近づけるように今回の経験を活かし、奈良教育大学教職大学院で今後も精進したいと思います。

3 「奈良教育大学教職大学院修了生・関係者の会」

平成29年度「奈良教育大学教職大学院修了生・関係者の会」を下記の通り開催する予定です。

※ 松川教授、吉田教授の最終講義については、どなたでもご参加いただけます。

日時・平成30年3月18日(日) 10:00～	開会式
場所 奈良教育大学大会議室(本部管理棟2階)	
最終講義	
・松川 利広 先生「ことばのたび」	10:10～10:55
・吉田 誠 先生「技術科教育史」	11:00～11:45
総会・閉会式	11:45～12:00
懇親会	17:30～19:00

本教職大学院は、平成20年4月に開設以来、来春で10周年を迎えます。この間、修了された院生の皆様の総数は平成30年3月修了生を含めると150名を超えることとなります。本会を通して、院生、修了生、教職員等のネットワークがますます密になり、貴重な情報交換の場となれば幸いです。本年度は、教職大学院開設10周年を記念して、同日に『奈良教育大学教職大学院開設10周年記念シンポジウム』も開催いたします。

4 授業紹介「小学校外国語とそのコーディネーション」

教職大学院の講義紹介、その記念すべき第一回は吉村雅仁先生担当の講義「小学校外国語とそのコーディネーション」を紹介し、小学校では、中学年からの外国語活動や、教科としての高学年外国語科の導入など、外国語の学習は今後ますます盛んになると考えられます。しかし、私たち院生は、外国語を教える経験に乏しいうえ、小学校で外国語を教わったという経験も少ないことを踏まえ、本講義では言語習得の視点から授業を見つめ、最後には教材開発をして院生同士で模擬授業を行いました。さて、日常言語能力(日常会話)が身につくの1~2年、認知学習言語能力(読み書きやディスカッション)には5~6年かかると言われています。他にもTOEIC200点程度の者を730点程度まで上げるのに英語母語話者のもとで2000時間というデータもあります。仮に小学校1年生から週に1回の授業を始め、高校卒業まで12年間外国語を学習したとしても、概算で530時間不足します。このように、これまでの外国語の教育を見つめても圧倒的な時間不足が課題として浮かび上がっていました。



吉村雅仁先生

では、外国語の学習で教師はどのようなことができるのでしょうか。1つに、将来外国語を学ぶときに備えた素地づくりがあげられます。言語そのものの理解や言語の学び方を知ることを促すようにするのです。それはすなわち言語への意識を育てることです。言語への意識を育てようとしたとき、英語だけを扱った授業では必ずしも充分とは言えません。世界の多様な言語を観察・比較・類推するなどの活動の中で、外国語の学習とは一番縁遠いと思われがちな国語(日本語)も外国語の学習たり得ます。これらを前提に、4名の院生が教材研究と模擬授業を行いました。そのうちの一つ「奈良観光マップを用いた授業」を今回紹介することにしました。

- 〈単元〉 「Turn right.~道案内をしよう~」(“Hi, friends!2” Lesson4)
- 〈本時のねらい〉 奈良観光マップから様々な言語の建物の表し方に気づく。
- 〈活動〉 様々な言語の奈良の観光マップを見て「上」「下」「左」「右」の表し方を探る。
- 〈教材〉 奈良観光マップ(日本語、英語、韓国語、中国語、ドイツ語、フランス語)
- 〈教材のねらい〉 日本語の奈良観光マップから他の言語のマップ上の神社の位置を特定し、神社、寺、城跡の表し方を探る。そうすることで日本語と他の言語を比べさせたり、語順の違いなどに気づかせたりする。

「Turn right.~道案内をしよう~」(“Hi, friends!2” Lesson4)の第一時の授業づくりと模擬授業を行いました。「道案内」の単元はただお決まりのフレーズを英語で繰り返し言う活動が多いと思いますが、それではあまりにも活用の幅が少ないと考えました。

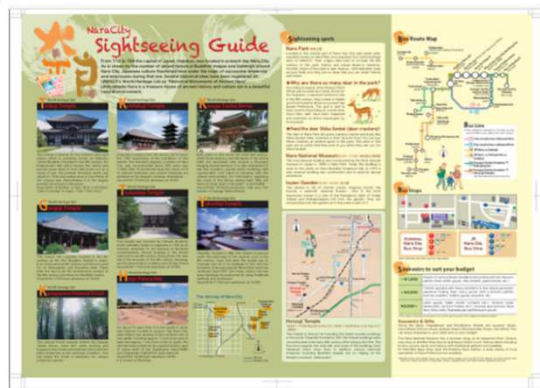
そこで、今回は授業づくりで大切にすべき縦のつながり(学年、校種)、横のつながり(教科の横断)を意識し、子どもたちが言語の違いに目を向けられる授業を実施できないか考え、模擬授業を行いました。奈良には外国人観光客も多く来るため、奈良観光所にある様々な言語の奈良観光マップ(日本語、英語、韓国語、中国語、ドイツ語、フランス語)に目をつけました。

本単元は3年生の社会で扱う地図記号、そして中学1年の地理との接続を意識し、第一時の授業を行いました。今回の授業では他の国にはない神社や寺を奈良観光マップではどのように表しているのか、日本語のマップで場所を探しながら活動を行いました。そのような言語に着目させる活動を通して、生徒役は語順の違いや、ある言語の地図には一部の神社が載っていないなど様々な気づきを得ていました。

もちろん私自身英語は得意ではない上、韓国語、中国語、フランス語等は一切できません。授業をつくる上で、奈良観光マップを通して、観光用の地図記号、世界遺産の各国の表記など次々疑問が生まれ、教材研究の楽しさを感じましたが、授業準備にはかなりの時間がかかりました。そのため、実際授業をしてみるとうまく伝えきれないことも多かったです。今後、教師の英語力や授業力の不足を含めて、どのように教材を活かし切るかが課題であると感じました。

言語への意識の育みを考え、世界の多様な言語を観察・比較・類推させる教材を用いた授業は、学習者がただ言葉を繰り返す外国語活動ではなく、気づける外国語活動になりました。

今後、外国語を教える経験に乏しい私たちはどのような外国語活動の授業を展開できるのか考えていく必要があります。身近なものを活用して言語を意識させる活動はメタ言語能力を高め、言語の多様性に触れることとなり、現在の外国語活動においても有効であります。今回は奈良観光マップを用いて言語を意識させる授業を紹介しましたが、皆様は、この奈良観光マップという教材からどのような授業を構想されますか？



あとがき

今回から院生も編集にかかわることになりました。多くの方々に原稿執筆を依頼し、ご協力いただきましたこと、感謝いたします。

改めて文章は書いた人の人柄を表していると感じました。僅かな言葉遣いや表現の違いが、人柄を連想させるのでしょうか。編集の手が加わっている箇所もありますが、「この人はどんな人なのだろう」と想像しながら読むのも楽しいのではないのでしょうか。その一方で、編集には個性や人柄を極力なくした無味無臭の文章作りが求められるのが難しいところです。



(編集員・M1小金沢)

2018年 3月12日 発行
奈良教育大学 大学院 教育学研究科
専門職学位課程 (教職大学院)
〒630-8528 奈良市高畑町
TEL & FAX 0742-27-9354
<http://www.nara-edu.ac.jp>
発行 奈良教育大学 教職大学院広報係

